



馬 耳 東 風

先頃筆者の中学校以来の友人O君が弓道範士の称号を授与された。武道には段位とは別に錬士、教士、範士という称号があり、これらは剣道、弓道等の武道の普及と指導に功績のあった人にそれぞれの武道を所管する財団法人（弓道では全日本弓道連盟）から授与されるものであるらしく、範士は最高位であるという。O君は大学入学後に弓道を始めたが、爾来45年余に亘って練習に励み、段位を上げて行くとともに弓道連盟の役職を歴任するなどして弓道の普及と指導に尽くして来たのが評価されたものであろう。ある時の五月の連休中、何気なくテレビを見ていたらO君が弓を引いている姿が大写しされ仰天したことがある。毎年五月の連休に京都で開催される全日本弓道大会で弓を引いていたのである。

大学時代は、帰郷するたびに彼と会い何時間も語り合ったものである。筆者はアルコールを飲みながらであるが下戸の彼はお茶や水を飲みながらである。会うたびに弓道の話が必ずでた。ある時、昇段はどのようにして評価されるのかという質問に、「弓術ではなく弓道なのだから、的に何本当たるかだけでなく、弓を引くときの姿勢や拳措動作を総合的に評価して決められる」という答えが返ってきた。筆者は、「的に当たりさえすれば姿勢などどうでもいいのではないか」といった難癖をつけると、「武器としていた時代、同様に当たるのでも、山なりの軌道で当たるのと直線的に当たるのでは敵に与えるダメージが違う。直線的な軌道で鋭く当てるには正しい姿勢で引かなければダメだ。」という答だった。メートルの上がっていた筆者は、「的に横に高速度カメラを設置し矢の飛翔状態を点数化すればいい。君の専門だろ

う？」とって情報工学を専攻するO君を挑発したものである。議論は果てしなく続いたが、今振り返っても下戸の彼が酔っぱらいの難癖に良く付き合ってくれたものと頭が下がる思いがする。青春の青臭い（アホくさい）議論には今思い出しても冷や汗が出るが、O君が弓術ではなく弓道に打ち込んでいるということは何となく理解でき、また以来「道」とは何だろうという疑問を抱くようになった。

茶には茶道があり、花には華道がある。酒にはどうして酒道がないのだろうか。酒ほど難しい飲み物はない。「酒は飲むべし百薬の長」なんていうけれど、飲み過ぎれば毒以外の何ものでもない。この辺でやめておこうと思ってやめられることは滅多にない。たいていは飲み過ぎてしまう。こんな難しい飲みものにこそ飲み方の「道」があってしかるべきだと思うのは不真面目であろうか？ ある時、都内某所に、飲み方にうるさい店があると聞いて出かけていったが、単に他の客の迷惑にならぬよう静かに飲めというだけのことであった。話が弾んでちょっと声高になると、店主が「シーッ」と口の前に人差し指を持って行くのには笑ってしまった。たしかにこれも飲み方の一つには違いないだろうが、「道」にはほど遠い。端然と酒を嗜み、心愉快にはなるが決して乱れず、気品を漂わせている、そんな飲み方にあこがれる。

弓道は継続すれば努力に応じてそれなりの進歩をする。しかし「酒の道」は継続すればするほど酒癖が悪くなる。そうならないために、筆者は日々酒道を極めるつもりで杯をとっている。O君との落差は誠に大きいものがあるが、なに、好きな道を究めることに違いはあるまい。

(久)